
楽園への招待状

英華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽園への招待状

【Nコード】

N9200A

【作者名】

英華

【あらすじ】

組織壊滅後のお話。志保のもとに、モニター旅行の招待状が届いた。退屈凌ぎに出かけた旅行は、APT X4869と志保を誘う罠だった。

1、誘い

1、誘い

それは突然だった。

『温暖な南の島で、一ヶ月たっぷりと、日常をわすれて、美を追究する旅にご招待します』

宮野志保の手のなかには、昼間の買い物中、通りすがりに渡された招待状があった。

他に、詳細な日程表、この旅行の主催者の連絡先などと、航空チケットがすでに同封されていた。

内容は、某有名エステ会社と旅行会社の主催するプランのモニター旅行。

長期滞在型リゾートホテルで、フィットネス、エステ、リラクゼーションなどプログラムされたコースを受けるという代物で。

場所は太平洋に浮かぶ、ある小さな孤島。

モニターだから、旅行代金は要らない。期間は一ヶ月。出発は一週間後。

—— 一ヶ月丸々自由になれる人って、いそいでいなくて困って。

あなたみたいな綺麗な方なら、モニター終了後の広告もお願いできるし、一石二鳥ねっ。

その旅行を企画したという女に、私はそう説明された。

なんとなく断り辛くて、自分らしくもないと思いながらも、ついっ

いYESの返事をその場でしてしまった。

「で、その旅行に行くつもりなのか？」

志保は不快をあらわにした表情をみせた。

この場に偶然いあわせた隣家に住む工藤新一が、さもあたり前のように口をはさんできたからだ。

自分は博士に言っただつもりなのに。と。

「志保くんがそう言っ、聞かんのじゃ。新一くんもなんとか言っ
てやってくれんか？」

そう博士は言った。

博士は肩をがつくりと落として困り果てている。その姿は父親さな
がらだ。

傍からみるのにはほほえましい限りのその光景は、本人にとっては
そうは言っていられない。

なにしろ、志保が博士に突然言っただのは、訳のわからない、その上
興味がまったくなさそうだと思えるエステ旅行に一ヶ月も行く、
という話だっただから。

とにかく心配で心配でしかたない、と、なにやら落ちつきのない様
子だ。

ここは阿笠邸。

志保は先ほどの買い物からもどっていた。

そして、この家の主である阿笠博士と、博士に用事がある、そう言
ってひさしぶりに顔をあわせた新一の三人で、
コーヒーを飲みながらくつろいでいた。

「べつにに興味はないのよ」

志保は淡々と言った。

新一に会うのは久しぶりだった。解毒剤をここで渡して以来、二回目だった。

もとの姿にもどれば昔のようにはなれない、そう考えていた。

それに、解毒剤を渡すことで、彼自身は、あの一件からは手が切れた、つまり私とも縁が切れたのだと考えていた。

「じゃあなんだよ？」

新一はソファに身体をふかっと預けて、怪訝そうに質問した。

彼を一瞥して、コーヒーをひと口、口にしてから、志保はほんの少し考えた。

内容に興味はないけれど、この無機質な日常に風をいれてみたいとふと思うことがある。それに、だ。

「…退屈だから」

と、志保はつぶやくように言った。そのため息にも似た小さな言葉を、探偵である彼が見逃すことはあるはずもなく、

「はあ？ たく、いー加減にもほどがあるぜ」

お前は人が心配してるつつうのに、と、深いため息とともに言った。そして肩を落としてあきれていた。

思ったとおりの答えが返ってきた、そう思って志保は口もとだけ緩ませた。

どっちがいいかげんだなんてわかりっこないのに。と。

組織が壊滅してから約半年がたっていた。

志保はそのとき手に入れたデータをもとにして、役目を果たすべく解毒剤を完成させて、

ようやくコナンと哀は『工藤新一』と『宮野志保』にもどっていた。新一はその昔と同じようにもとの生活に戻って、帝丹高校に復帰し

たし、探偵業もそのままに、
蘭とは無事、仲良くしていると聞いた。
それは誰もが思う、『必然』のことだった。

「べつにフツーだよ」

数カ月前、もとの姿にもどってから初めて会ったときに、彼はそう言った。

二人の様子が気になって、志保は一度だけ聞いてみたのだ。
でもそれ以上は聞けなかった。

フツーって、フツーに付き合ってるってことなんだろうか。フツーに幼なじみなんだろうか。

彼は人のココロに、特に恋愛感情においては、事件のときに果敢に発揮されるあの感性は、まったくもって役目を果たさない。

それでも、コナンとして彼女のそばにいて、お互いに自分の感情に気づいているものだと思っていた。

まあ、あのとき、解毒剤を渡したときに、私が言ったことだって、彼にとっては気にもとまらない言葉なのだ。

とりとめのない回想にふとわれに返って、他人の退屈な感情を考えるだなんてばかばかしい、

そう思っ、志保はコーヒーをぐいと飲みほした。

「今晚、ごはんよろしくな」

目の前にいた新一が、手をあげてニカツと笑って言った。

「なによそれ。冗談でしょ。彼女に作ってもらえばいいじゃない」
志保は無然とした。そう強く抗議したつもりだったのに。

「いつもはそうしてんだけど、今日蘭は園子と買い物に出かけて、そのまま夜ごはんも食べてくるんだってさ」

だからいーだろ、久しぶりなんだし。そう言っ、彼はそのために

持ってきたであろう、推理小説の本に手をのばした。

この人はこういう性格の男なのだ。江戸川コナンのときも、工藤新一になっても。

憎めない、といえば聞こえはいいけれど。

そのあいまいな行動は、いいかげんじゃないの？

そうやって、あなたはいつも人のココロをぐちゃぐちゃにかきまわして、平然としている。

人の気も知らないで。

「はいはい」

志保は適当な返事をひとつして、キッチンへと立った。会話をするのも億劫になったから。

宮野志保に戻ったからと言って、劇的になにか変わるわけではなく、ただ淡々と毎日が過ぎていく。

なにもない、平穏無事な生活。

おびえるものが一つなくなったかわりに、見たくないものが一つ。気分転換してみようか。ひさびさの海外もわるくない。

そう考えた志保の、それがすべてのはじまりだった。

2、幽閉

2、幽閉

一週間後、志保は飛行機を二回乗り換えて、ようやく小さな空港に到着した。

実は無理に出てきてしまった。

博士はしきりに、大丈夫か、と言っていた。おろおろとしながら。新一は、おいしすぎる話がなにかひつかからねえか？、と言っていた。眉根にしわを寄せながら。

そう言った彼とは、やっぱり偶然居合わせた一週間前以来会っていないけれど。

そこはあたたかい、というより暑かった。陽射しがじりじりと肌に射して、痛いのだ。

太陽の下はいつになっても苦手だと、志保は思う。

でも、肌はさらつとしていて、湿度はないのだと感じる。日本の多湿には少々うんざりさせられていた。

三百六十度、見渡すかぎりが青い空だった。健康的な色をした青。深く透きとおって、吸いこまれそうな青い海が地平線の下に広がっていた。冷めるような青。

地形はなだらかで、海と陸地のはざまには、白い砂浜が長く伸びていた。

砂の上は陽がじりじりと照りつけていて、やけどしそうな熱さになってそんな気がした。

私はとうてい足を踏み入れることはできない、と苦笑しながら。

この島全体が一大リゾート地である、と、以前手渡された案内には

書いてあるのを読んだ。

たしかにそんな印象をつけた。日常を忘れてゆるりとくつろぐには最適と言えそうだった。

自分が住む米花町も、雑多な都会の一部だ。その自分の暮らす場所とまるで異なる環境だからこそ、こういう場所が価値がある。

普段は都会に住まうであろう、美しく着飾ったセレブたちが行きかっている姿も見かけた。

なるほど、ツアー旅行のプランにして売りだせば、それなりに売れそうな気もした。

志保は用意されたホテルに入って思った。絢爛さに目を見張って、五つ星くらい、と。

新一の言うとおり、たしかにおいしい話だ。

そのことに一瞬不安になって、そう言った彼の顔がふっと浮かぶ。あとで思えば、それは遅すぎた虫の知らせだったのかもしれない。でも志保は、頭をぶんとふって、彼を脳裏から追い払った。

志保はフロントでチェックインを済ませた。

少し待ってくれ、と言われて、あらわれたのが、外でみたセレブたちに劣らない美しい女性だった。

彼女に奥にある部屋に案内された。ふたりつきりとなった。

彼女は美しかった。無駄な動きもない。それが妙に嫌な感じだと、ぞくつとした。

身体はすらりとして細く、でもきちんと鍛えてあるような印象で、華奢な感じはしない。

よく手入れされたアール 그레이の髪。

一見すると若く見える。けれど、彼女がかもし出す妖艶さからすると、四十代半ばといったところだ。

そう志保は考えた。

彼女は自分がここのボスであると告げた。そして、

「待っていたわ。シェリー」

と、口許に笑みを浮かべて言った。

それは言葉のとおり、待ちこがれていた、早く会いたかった、そう言わんばかりの満ち足りた表情だった。

まるで永く狙っていた獲物を捕らえた獣のような。

その、シェリー、という名前。

捨てた、と思っていた名前。

呼ばれることのない、と思っていた名前。

そのシェリーという名前が、自分がここに呼ばれたすべてを意味していた。

そう、志保は感じていた。

その衝撃にめまいを覚えながら、志保は今ある状況を考えて。

半年前に組織は壊滅した。

そこにいた人間も、全員ではないにしろ、上層部は捕まっているのだ。今ごろは檻の中にいる。

彼女は組織の人間ではない。これほどのオーラがある人間がいれば、否が応でも目立つはずだ、と。

「驚いているようね」

彼女はさも愉快そうに言った。さらに続けて、

「私は、あなたのいた組織とは無関係よ」
と言った。

予想通りの答えが、志保の気にさわった。

「…だったら、シェリーと呼ばないでくれるかしら。で、用件はなんなの…？」

体中から血という血が音をたてて引いていく。それをぐっと我慢して、やっと絞りだしてひと言、言った。

できるだけ普段とおりに言っただつもりだった。でも、動揺していた。彼女は志保に妖しくにつこりと微笑んで、淡々と話した。

「あなたは、ある世界では名の知れた存在なの。多くの人が、あなたとAPTX4869に興味があるわ。

もちろん、APTX4869の実物もデータもなに一つないことは百も承知。

データがあればデータで良かったのだけど、あなたが破棄してしまった。だから薬を作りだした、あなたが欲しくてね」

女はみるみる青ざめていく志保の様子など、微塵にも気にせず、話続けた。

「要するに、APTX4869と優秀なあなたの頭脳が欲しいわけなの。心配要らないわ。

たとえ、薬を作り終えても、あなたを手厚くもてなすことには変わらない。ただし裏切らなければね」

シェリー、という名前の、その意味。

彼女は毒を作ることができるのだ。この女はシェリーが作る毒薬が欲しいのだ。

志保は彼女の言葉に愕然としながら、愚問だと思いながら質問した。「…薬の目的は？」

「あなたは知らなくていいことよ。余計な詮索はいけないわ。これは忠告よ」

そして、この島の中を自由に移動できるが、この島のいたるところ

にあるカメラと盗聴機が、自分を常に監視していること。

最寄りの島は数百キロ先で、逃げだすなどは不可能ということ。
おかしい真似をすれば、大事な友達が一人ずつ消えていくこと。

「じゃ、仲良くしましょ」

ボスはそれだけ言っで、来たときとおなじようにニッコリと微笑んで、悠然と出ていった。

そして私は、幽閉された。

3、後悔

3、後悔

ボスの出て行くトビラのばたんと閉まる音と同時に、志保は安堵に似たため息をもらした。

実際、安堵したわけではない。けれど、彼女が話した言葉のすべては志保に極度の緊張を強いた。

それから解放されたことは、束の間だけでもほっとしたものをもたらした。

志保はその部屋にひとり残された。そして、馬鹿げた話だと思ったと同時に、さらに思った。

私は、APTX4869など、二度と作りたくない。それだけだ。

しばらくするとベルボーイが現れ、志保は居室となる部屋に案内された。

建物全体としては、さほど複雑ではないようだった。部屋に到着するまでの歩く途中で、おおまかにわかったことだった。

このホテルと称する建物が核となっていて、下層階に管理部門、上層階にホテル、棟続きに病院棟がある。

造りはリゾートホテルらしく、清潔感を感じさせるようにという配慮だろうか、白を基調にゆったりと大きな空間をもっている。

いたる所に花と緑をあしらひ、手入れが行き届いていた。

到着した部屋は、一般の客室と言われればわからないほど、そこに馴染んだ部屋で、位置にあった。

しかし、部屋の入口には客室では使わないであろう、セキュリティシステムが備えつけられていたし、

部屋内にカメラはないけれど、盗聴機はあると言っていた。

唯一救いなのは、大きな窓からみえる景色だった。

その景色は、大きな窓の白いサッシのフレームに、すっぽりときちんとはまっていた。

まるで、あらかじめ考えて切りとられたかのように。

人工物のないそれは、ただただ美しかった。

ここには似つかわしい、そう思いながら、志保はそこに映し出された景色を眺めた。

それをみていると、捕われている感はまるでなくなってしまう。そう思って、苦笑した。

着替えをしようとクローゼットを開けた。その光景に志保は唖然とした。

志保にぴったりのサイズだと思われるさまざまな服や靴がならんでいたからだ。

「用意周到なこと・・・」

志保は思わず、ひとり言をもらした。

その周到なプランに、自分はまんまとはめられたのだ。あきらかに、浅はかだったのだ。

窓際にある、大きめのふかふかする椅子に身を委ねて、ふうと大きく息を吐いた。

志保は、ぼんやりと窓の方角を眺めて、考えた。

組織は壊滅した。

そのことに安堵していた。平穏無事な生活にあたり前だと慣れて、漫然と暮らしていた。

悪いことを考えるのは、彼らだけじゃない。それも当たり前のこと

だ。

この状況が予測できなかったわけではなかった。そのため、A P T X 4 8 6 9 を公にする方法もひとつの選択肢だった。

そうすれば、自分の身の安全が確保されたかもしれない。それでも、公にしないことを選択した。

他の誰かの考え方によっては、平和利用もありうるかもしれないが、同時に殺傷能力があることにはわりはない。なにより、これ以上の犠牲はもう沢山だった。

そして、データも薬も跡形もなくすべて破棄した。

そのつもりだった。

ここに来るまでは。あの女が言うまでは。

薬を作れる可能性がある、自分がいる。

それだけで彼女らにとって価値があるとは、思いもよらなかった。

—— 自分の運命から逃げるな。

灰原哀のままありたいと言った私に、あなたは聞き飽きるほど聞いた言葉をふたたび聞かせた。

わかっていた。

このままじゃ前に進めない。と。

だから、解毒剤を飲んだ。

でも、まだわからない。

この選択がよかったのかどうか。

空虚な日々には平和ボケして、隙だらけになった。そうして、捕らわれた。

疑うことを忘れた私が浅はかで、注意深さが足らなかつただけだ。

でも。

私を、待っててくれる人は、必要としてくれる人は、
誰だったのだろう。

窓のフレームの中には、美しい景色がみえる。

その景色のなかの、澄んだ海の、そのまた向こうの、はるか彼方に
いるであろう、想い人に問いかけてみた。

4、散策

4、散策

翌朝。志保はひとり、ホテル内のビュッフェで、朝食をとっていた。あまり穏やかでない顔をしながら。

それは考えても考えても、この状況をどうすることもできないことに起因していたのかもしれない。

志保が昨日、部屋に案内されてから、この状況をぼんやりと考えていた。

一ヶ月の期間でここにきたこと。それはつまり、最悪の場合、一ヶ月は騒がれない、ということ。

ここに到着した、という連絡がないことに、あのふたりがすぐに不審がってくれるか、ということ。

それらは彼らに頼るだけの、淡い淡い期待の蜘蛛の糸のようなものだ。と。

こんな状況には慣れている。

むしろ、丁重に扱われているのだから、よしとしなければならないくらいだ。

でも。APT X 4 8 6 9 だけは。

と考えると、気が重たくなってくるのは事実だった。

「朝から恐い顔してるわね」

背後から声がして、志保はびっくりとした。思考を遮ったのは昨日の、ボスだといったあの女だった。

彼女はあたり前のようにして、志保の向かいの席に座った。

昨日のように動揺することはなかった。いつも通り、背筋を伸ばして、凜としていればいいのだ。

「おはよう。用意した服を着てくれたのね。よく似合ってるわ」
彼女はにっこりとして言った。

開口一番、褒め言葉だった。普通によくしてくれるように一瞬でも錯覚することが嫌だった。

けれど、その均整な顔に浮かべた笑みは、思わず勘ぐりたくなるくらい、の悪魔の微笑みだ、志保はそう思った。

「ありがとう。私にプレゼントでしょ？」

でも、志保は平然としてこたえた。そうすることが、とりあえず今、ここでは必要だと思ったから。

「そうよ。あなたには不自由ないようにするから、必要な物はすべて言ってちょうだい」

わかったわ、と首をたてに振って言った。

組織より居心地は悪くない。けれど、彼女だてきつと、笑って人を殺す人だろう。あの組織の人間のように。

「このIDカードと携帯電話を渡しておくわ。このカードを見せれば、島のいたるところで不自由しないはずよ」

そのIDカードは社員証のような感じで、まるでそれと変わらないようだった。

セキュリティと連動になっているのだと、思った。

「ね、研究室はどこにあるのかしら？」

「となりにある病院の上層階よ。明日は研究室にご案内するわ。今日一日はゆっくりしてちょうだい」

ひとりでいられることに、志保は安堵した。

「そうね。ご好意に甘えさせていただくわ。島の中はフリーだったわね？」

「もちろんよ」

志保は、朝食を早々に切りあげた。

あの女の、しかも満面の笑みをたたえて、目の前に居座られては窮屈だったから。

とはいえ、どうせ監視されていることには変わりはないのだけど。

ホテルの玄関を出て、外を仰ぐ。

数台の車にまじって、正面にあるロータリーのすぐ脇に、バスが停まっていた。トロリーバスだった。

志保はバスに近寄って、バス停に書かれた案内を見た。

島全体のイラストのような簡単な地図と、時刻表と、観光向けに書かれた説明文があった。

それは、島をぐるりと一周するバスだった。

時刻表からすると、島一周するのに必要なのは約一時間だとわかった。

どうせ戻ってくるのだから、そう思って、志保はぶらりと乗ってみた。

なだらかな海岸線に沿って走る道路を、ゆっくりとした速度でまわるバスだった。

バスに揺られながら見た景色の、目についたものと言えば、空港、港、港湾倉庫、ゴルフ場、ホテル、病院、競技場、プール。

あとは緑豊かでなだらかな丘陵が広がるだけだった。

際立った施設はなかった。隠そうとするなら、あたり前のことだけれど。

穏やかで、静かで、平和で、楽園のよう。

「確かに”いいところ”ね…」

ふと口から自然にでた言葉に、自分で苦笑いした。
避暑に来ただけなら。もちろん、こんな予定ではなかったのだけ
れど。

そう思いながら。

平和なリゾートアイランドの仮面をかぶった南の島。

病院も表向きだけで、本当は研究所なのだろう。

モニターを装った誘拐。薬の開発。

ここに大きな犯罪組織がありそうなのは、否めない。

そう考えるだけで、知らず知らず、ため息が大きくでる。

本当は、あまり深いところに首を突っ込みたくもなかった。

そのくせ、動いてしまうところは、身についた性分だったりするの
かもしれない。

—— 余計な詮索はしないことよ。

志保の脳裏に、あの女の声が気味悪く響いた。

背中にぞくつと悪寒が走って、薄気味わるい感触がいつまでも離れ
ない。

見えない目がこちらを見ているのかもしれない。この表情だって、
できれば悟られたくはない。

今日はもう戻るべきなのかもしれない。長居は怪しまれる。

そう考えて、志保は部屋にもどっていった。

5、疑惑

5、疑惑

この島に到着してから、はや一週間。

志保は、到着して三日目には研究室に行くようになっていた。

正確には”行つて”いるだけ、研究しているように”らしく繕つて”いるだけで。

APTX4869を作るように言われてはいるけれど、そもそもデ―タも薬も全て破棄している。

自分の記憶だけを手掛かりに作れ、と言われても、一朝一夕で出来る代物ではない。

それに、あの薬を作る気なんて微塵もなかった。

罪の上塗りなど、熨斗を付けて返したい所だけれど、今ここで抵抗するコトは、すなわち死を意味する。

だから、咎められない程度に過ぎていくコトが賢明と、彼女は判断した。

幸い、一つ部屋に閉じ込められなかったし、監視下だけれど行動の自由があつて、昔を思えば苦痛でない。あまりに長期に渡らなければ耐えられる。

それは、彼がここに助けに来てくれるのを待っているとも言えた。

志保はその日も、陽の落ちる前に研究を適当に切り上げて、気のむくままに図書館へ向かった。

こんな孤島の図書館とはいえ、かなり広い館内には相当な蔵書がある。

一般的な読み物に混じって、医学の専門書が、特に、遺伝子、移植、薬に纏わる本が、違和感を覚えるほど多く揃っている。

志保はゆっくりと書架の間を進むと、ホームズの本ばかり並んだ棚が目に入った。

新一がコナンだった頃、飽きもせずホームズの話をよくしてたコトを思い出して、志保は懐かしく思った。

ついこの間まで小学生だった新一と自分の姿が脳裏に甦る。僅か一年だったけれど、楽しくて充実してて。

その後、解毒剤で身体は戻ったけれど、私のココロは急な成長に追いつけないで、あの頃に置き去りになったままだ。

『…ね、このまま”江戸川コナン”と”灰原哀”でいい？私はこのまま、あなたと一緒にいたいのに…』

叶う筈のない想い。分かっていたのに。

あの時私は、彼を笑って送り出すコトが出来なかった。

ふと、志保は横に立つ女性に目をやる。三十歳前後の綺麗な人だ。そういえば、年齢こそ様々だが、ここには女性がとにかく多い。家族連れも夫婦連れも、滅多に見ない。

…きつと、この施設の性格上、よね。

本来、このリゾートアイランドは、何を得意として集客しているのか、志保は知らなかった。誘われるままに来てしまったから。

観光だけにしては少し魅力に欠ける。自分のかかった罠のような、リラクゼーションだけとは考えにくい。

志保が難しい顔をして疑惑を巡らせていたところへ、隣にいたその女性が声をかけてきた。

「あなたは若いのにドクター？」

思考を遮られて、驚いた顔で志保は振り向いた。

「え？ええ。薬が専門だけど…。でも何故？」

「その名札で分かっただけ。随分若そうなのに、ドクターなのね」

彼女は人懐こそうな顔をして、志保の首から下げられたIDカードを指した。

…少し話してみようか。何か分かるかもしれない。

そんな思いにかられて、志保は会話にのった。

「あなたは、ここに避暑にきたの？」

「んー。そうね。それも含めて、あと体外受精ね」

「え？」

「ここって、結構、名の知れたところらしいのよ。少し値は張るけれど、希望通り用意してくれる、って聞いて、紹介してもらってきたの」

志保にとっては、予想外の言葉だった。

何故、ここで体外受精なのか。

話もそこそこに切り上げて、頭を混乱させながら、部屋に戻った。

同じ頃、阿笠邸。

「なあ博士、宮野から連絡あったか？」

新一は最近、元氣のない博士を氣遣って、阿笠邸に来ていた。

「実は全くないんじゃないよ。もう一週間経つというのに。便りがないのは元氣な証拠というが、胸騒ぎがしとるんじゃない」

博士は小さな溜息を一つして俯いた。大きな背中が、最近では小さく見えてしまう。

こんな博士は見てらんねーな…

心配かけてるコト、アイツは分かってんのかよ。

旅行と言ったって、一週間連絡がないってのは、なんかあると思うのがフツーだな。

大体、一ヶ月もタダで贅沢な旅行なんておかしな物を、アイツが疑わないのも変だけだな。

イヤなコトでもあったんだろうか？

ここにいない彼女に色々と問いても、返事は返ってこない。

「…ちよつと調べてみるか」

ったく、アイツは世話の焼けるヤツだ。一人で居られないくせに、一人になろうとする。

6、思案

6、思案

今日一日は、馴染みの警部殿に呼び出されなくて、無事授業を受けるコトが出来た、今はその帰りだった。

新一の隣で、女性二人が他愛もない話に花を咲かせて談笑している。駅前に新しいスイーツの店が出来たとか、そんな話だった。男にとつて、そんな話はくだらないけれど、彼女たちは楽しそうだ。

とはいえ、この帰りの時間帯に、自分がいないコトも珍しくない。

新一はそんな彼女たちの日常を横で見ながら、歩調を合わせて歩いていた。

「ねえ、新一」

「あ？」

「昨日、園子と帰りにこんな貰ったんだけど」

蘭はそう言つて、カバンから一枚の紙を取り出して、新一に手渡した。

「これって、志保さんが行ったのによく似てない？」

「そうそう。明らかにインチキっぽいけど。どう？」

蘭と園子は、新一に代わる代わる意見してくる。

その紙の冒頭には、

『温暖な南の島で、一ヶ月たつぷりと、日常を忘れて、美を追究する旅にご招待します』

と書かれた文字がある。そして、その下には、その旅行について詳細に書かれている。

新一は溜息一つして、蘭と園子を見た。

「そうだな。…多分、全く同じだな」

やっぱりそうだった、そうはしゃぐ二人。

ふいに新一の携帯が鳴る。

面倒なコトを聞かれないで済む、そんないいタイミングの着信に感謝しつつ、着信ボタンを押す。

その電話は、ジヨディ先生からだった。

通話中、新一の顔がみるみるうちに険しくなっていた。

そんな彼の顔を、蘭が心配そうに覗き込んだ所で、会話が終わった。

「ねえ新一。怖い顔してるけど、また事件？」

「…ああ。大変面倒な事件だ。つとに」

新一は不安そうにしている蘭に苦笑して、大丈夫だよ、と一言言った。

「おい、蘭も園子も、間違ってもその南の島とやらに行くなよ」

「受験生なんだから、行ってるヒマもないわよねー」

新一の心配をよそに、二人は当たり前だと言わんばかりに頷きあっている。

「でもどうして？志保さんは行ってるんでしょ？」

蘭は不思議そうに質問してきた。ごもつともな指摘だ。

「…まあな。宮野ならご招待だけど、オメエらがいけばモルモットになるだけだ」

「え？どうゆうコト？」

「何よそれ？」

「そこに行けば、蘭と園子は、宮野の実験台になるってコトだよ」

二人とも事情が飲み込めずに、眉をしかめている。

「オメエまで、余計な心配をかけさせないでくれよな」
そう言っても、納得いかない様子だ。

新一は暫く思案した後、

「わりい、俺、博士んとこ寄つてくから。じゃーな」
そう言つて、一人軽く走つてその場を立ち去つた。

やっぱり、思った通りに怪しい所だったな。

FBIが目エ付けてるとこに、のこのこと一人乗り込んでいくんじやねーよ。ったく。

志保はボスと呼ばれて、ホテル棟の下層階にある、モニターなどの機器がずらりと並ぶ部屋にいた。

さほど広くない中央監視室のような部屋。

実際、島内の至る所にあるカメラから流れてくる映像が、代わる代わる映し出されていた。

「動きがあつたようだね、せつかくだからあなたにお見せしようかと思つて」

志保はボスを一瞥してみたが、彼女は口許だけを緩めて、あたかも楽しそうにしている。

モニターの一つが切り替わり、見慣れた住宅が映し出された。

それは阿笠邸だった。

いつの間にこんな仕掛けをしたのだろうか。

震える思いに顔を青ざめさせている志保をよそに、ボスは口許は緩

めたまま、冷ややかに画面を見ている。

暫くすると、玄関から新一が出てきた。その後ろには博士も一緒に、玄関口で何やら喋っているのが分かる。

それは、ほんの一瞬の出来事だった。

銃弾が一発、新一の横へ放たれて、白煙が上った。

画面の中の新一に、銃弾は当たりはしなかったものの、どこから飛んできたか分からない銃弾に、新一は怒りを顕わにしている。

志保は呆然とした。

いつまでこんなコトが続くのだろう。

組織は壊滅したのに。

私が博士のもとにいるから？

私が薬を作ったから？

私が組織にいたから？

私が存在するから？

どこからか分からない。

でも、歯車は間違はなく狂っている。

狂った歯車は元に戻らないの？

「やめて！」

志保の悲痛な叫びが空しく響く。

「工藤くんには関係ない。私はあなたに言われた通りに薬を作る。それで満足でしょ？」

ボスは、その綺麗な顔に不気味なまでの笑みを湛えて言った。

「あなたを思う方が大勢いらっしやるみたいで、少し忠告したまで

よ」

「新一くん、大丈夫か？」

「ああ、当てるつもりはなかったみたいだな…単なる脅しだ」

新一と博士は銃弾が発されたと思われる方向を睨んだけど、もうそこには何もなかった。

「くそっ！随分な歓迎だな。受けてやるーじゃねえか」

志保は驚愕の出来事に呆然としたまま、一人、部屋に戻った。

それから長い時間、志保はヒドイ自己嫌悪に苛まされるコトになる。

組織は壊滅したのに。

私が博士のもとにいるコト。

私に関わった人がキケンに巻き込まれるコト。

私が薬を作ったコト。

私が組織にいたコト。

あの薬が

沢山の命を奪ったコト。

工藤くんの、蘭さんの、大切な時間を奪ったコト。

薬は全て破棄した。

でもそれは、ただ一つ、私の記憶を残して、というミス。
私の中に蔓延る、この忌まわしい記憶。

そして、私が存在するコト…

だから言っただじゃない。

私なんて、戻ったって、生きてたって、仕方ないって。
私を待っていたのは、薬が欲しい人だけだった。

… APTX 4869を作ろうか。

志保は、ふとその思いにかられた。

今度は副作用の起こらないように。
間違いなく死に至るように。

最後に飲むのは、この私。

そして、この薬に終止符を打とう。

7、再会

7、再会

新一が阿笠邸で脅されてから二週間。島に到着してから数えれば、すでに三週間の日にちが経とうとしていた。

二週間前、自分のためにAPTX4869を再び作ろうと決めたその日から、志保は一日の大半を研究室で過ごすようになっていた。

灰原哀のときも、宮野志保に戻ってから、一日のほとんどを地下室で過ごすのが日常だったのだから、ここに来て与えられた研究室で与えられた課題をひとり黙々と作業するコトは、阿笠邸にいたときとほとんど何も変わらない生活だ。

自分に付きっきりの監視もない。あれ以来、工藤くんたちに動きがあったとも、手をかけたとかそんな物騒な話も聞いていない。そう思うと、不思議なコトにここの生活も一向に苦ではなくなって、慣れてしまえばむしろ快適なほどだった。

時々ふと思うのは、こういう場所が本来の自分の居場所のような気がするし、でもココロが休まる訳ではなくて、ココロの奥底で『居たい』と願う場所は別であって、やっぱりそこに『帰りたい』というコトだった。

そして、別に逃げるとか逃げないとかじゃなくて、あの薬は完全に処分しなければいけない、そう思う。それがあの薬を作り出した私に科せられた役目なのだと思うから。

一週間前くらいに、一つだけ馬鹿げたコトをあの女に言われた。実験をするマウスの用意をお願いしたら、マウスでなくて被験者にする、という。

それがどこの誰とは聞かされてはいないけれど、きっと自分と同じように、偽りの招待状を持って拉致されるのだろっ。こんなコトまで組織とそっくりなコトに随分うんざりもした。

その日も朝から自分の研究室に入って、もう何年も慣れ親しんだ作業を黙々と進めていた。

しかし、その日に限っていつもと違うコトがあった。普段ならわりと静かな島なのに、階下から騒がしい様子が伺える。そう思って、外の様子に気にかけて見てみると、飛行機の往来も、ホテル棟への人の出入りも、いつになく多い気がする。

まあ、あまり興味もないし、自分に関係ないし、ましてや考えるだけ無駄なコト。そう思いながら、視線を自分の手元に戻して、カプセルに薬を慎重に詰めた。

「とりあえず、つてとこね」

自分の記憶だけを頼りに、とりあえず調合だけしてみた。勿論、実験一つしてない薬がまるで使い物になるとは思ってないけれど、何かあったときの保険みたいなもの。

出来たばかりのAPTX4869を手にも宙にかざして眺めながら、こうして薬を作っている自分が、そのまた昔から何も変わってないような気がして、思わず苦笑いした。

「…おい。何だそれ？」

志保の気づかない間に研究室の扉は開いていて、そこには懐かしい人が、志保を見つめて立っていた。否、その表情は、睨んで、言った方が正しいかもしれない。

その姿、その声も、何も変わらない。私の愛しい彼。もう逢うコトのないと思っていた彼。

天国とか地獄とか、あるのかないのか分からないけれど、行くのなら自分は地獄だろう。そんな私でも、神様は最後にいい夢を見させてくれるのかもしれない。

「…くど…くん…」

そんなコトを考えて、志保は新一から目を離せないまま、声にならない声を発した。

「懐かしいな、それ。何のつもりだ？」

最後の夢ならば、優しい声が聞こえそうなものなのに。それとは裏腹に、静寂な部屋に、低く静かに響く声。

その声は緊迫した空気をもたらしながら、呆然としている志保にゆっくりと近づいてくる。でもこれは現実なのだ。しかも、彼は機嫌が悪いなんてものじゃない位、険しい顔をしている。

「あなたには関係ないわ。ほっとしてくれるかしら」

突然現れた彼に自分の動揺するココロを悟られないように、精一杯に冷静な顔を取り繕った。

志保は、新一がここから救い出してくれるコトをココロのどこかで期待していたとはいえ、万に一つも本当に現れるとは思ってもみなかった。その彼が目の前にいる。

「関係ないコトねーだろ。心配でここまで助けに来たんだぜ？ ありがとあの一言位、言っても損はないと思うけどな」

そう言っただけで新一は志保の細い腕を掴んで、A P T X 4 8 6 9 の入った小瓶を素早く奪い取った。志保は動揺している上に、あつという間の出来事で、何も言えなかった。

「相変わらず素直じゃねーな。ったく」

新一は奪い取った薬を眺めながら言った。

「これ、A P T X 4 8 6 9 だろ？ ここに来てまで、この薬を作っ

たのか」

俯いたまま言葉を発しない志保に、新一は呆れた様子で、半ば怒り気味に話し出した。

「お前が出てっってから、ここを調べたんだよ」

ジョーディ先生にお願いしただけなんだけどな、そう言いながら新一は話を続けた。

「大体、ここはFBIが目エ付けてた所って言うじゃねえか。そんな所に、のこのこ乗り込んでいきやがって。博士や俺がどれだけ心配したのか、分かってんのか？」

ほんの少しの沈黙の後、

「…ごめんなさい」

そう消え入るような細い声で、志保はようやく一言答えた。

そんな志保を見て、新一はようやく顔を緩めた。

「ま、助けにこれたからいい。無事で良かった。安心した」

志保はその言葉に驚いて、俯いていた顔を上げて新一を見た。

…ブジデヨカッタ。アンシンシタ。

私は蘭さんじゃないのに。正義のためなら突っ走っていく人なんだから、別に私だけにこんな風にする訳じゃないのに。その心配は、いつも通りの彼の優しさなのに。

自分だけへの優しさと一瞬でも錯覚したつもりもないけれど、それでも、その心配が今の志保には妙に嬉しくて、堪らず微笑してしまった。

「何言ってるの。優しい言葉は好きな人だけにかけるものよ。私に言う言葉じゃないわね」

その口調はいつになく優しく、志保は笑っていた。

「バーロ。うつせーよ」

そうなのだ。あなたが好きなのは、あの彼女。分かりきったコトなのに。ココロの中の浮き立つ気持ちに戒めを与えて、顔に笑いを作っておいた。

8、別れ

8、別れ

「で、ここに来れたってコトは、何か出たんでしょう？」
「あ？ ああ」

普段通りの志保の口調に、新一は驚いていたが、淡々と話した。
「まず、オメエみたいにさらわれて来たやつが他にもいるコト。誘拐だな。それから、精子、卵子の売買。そのお金のマネーロンダリング。で、今回強制捜査に入ったんだ。ここは、卵子と体細胞を使って作る細胞から、臓器を作ろうとした研究所だったみたいだぜ。バイオテクノロジーってやつだよな。その技術と新薬とで特許を早いとこ取って、金儲けしようとしてたんじゃねーの」
そういうコトはお前の方がよく知っているだろ、新一はそう言った。

「なるほどね。ようやく辻褄があつたわ」

図書館の蔵書。書架に圧巻して並ぶ遺伝子、移植、薬の本たち。ここにいる大半の女性も、図書館で会った彼女も、体外授精の名の元に、実に巧妙に集められた卵子の提供者。全てが頷ける。

「オメエ、ほんとに何も知らずにここに来たのかよ？」

「当たり前じゃない。知っててくるバカはいないわ」

しらつと答える志保に、新一は呆れて言葉もなくして。

「だから、ごめんなさいって言ったでしょ？」

彼の口からはため息しか出てこない。

「で、オメエにはA P T X 4 8 6 9を作らせてたんだな。利用されていただけなんだから、気にすんじゃねーぞ」

志保の顔に影が落ちて、息を大きくつくあいだ少し考えて、やっぱ

りその気持ちは変わらない、そう意を決して言った。

「工藤くん、もう私に関わらない方がいいわ。組織がなくなっても私は狙われるみたいだから」

「は？」

「私のコトは忘れて」

「…オメエ、何言ってる…！」

「博士にも、謝っておいて。あなたも。本当にごめんなさい」

「おい、ちよつと待て。どーしようってんだ？オメエの帰りを博士が待ってんだぜ？」

志保は今にも泣き出しそうな、辛い表情をしている。あくまで取り繕うとする表情が、より一層、苦渋を際立たせていた。

「…そんなコト、言われなくても分かってるわよ」

新一には一体どうしてこんな突飛な考えに至ったのかわからない。でもその瞬間、いつかこんな日がくるような錯覚さえ覚えていた。だったら、と言いかけたところで、話は遮られた。二人の背後に人の気配を感じて。

二人が振り向くと、そこに新一をここに連れてきてくれたジヨディ先生が立っていた。

「お迎えにきました」

二人に近づいて、さらに言葉をつないだ。

「あなたは当分、FBIで保護するコトにしました。それがお互いにとっていいでしょう？」

志保は束の間ホッとした表情をして、

「ありがとう。願ってもないコトね。行くわ」

そう言って、新一と目が合わないように伏せ目がちに、ひとりでドアに向かって歩き出した。

「宮野。逃げんじゃねーぞ」

志保が数歩進んだところで、背後から新一の低い声がして、その声に引き寄せられるように志保は立ち止まった。

そして振り向くと、困惑するくらいにまっすぐ自分を見ている彼がいて、志保は今度こそ目をそらさないで、今できる精一杯の笑顔で言った。

「工藤くん、助けにきてくれてありがとう。」サヨナラ」

「いいのですか？」

廊下を少し歩いたところで、ただならぬ様子の志保を気づかってジヨディ先生が尋ねた。

「…これでいいのよ。身から出た錆ね・・・」

志保は小さくうなずいて苦笑した。その少し潤んだ瞳に迷いはないけれど、愁いをたつぷりと含んでいた。

志保は来たときと同じように、身の回りの荷物だけを持って、ジヨディ先生と二人であの小さな空港に向かった。

博士の家にはもう戻れない。私に関わった人を危険に巻き込むから。行き先は？」

「勿論、アメリカです。久しぶりですね」

あのころの楽しかった日々は、夢のようで。きっと夢で。やっぱり夢でしかなくて。

無事平穏な日々を退屈だと言った、平和に惚けた私には、組織を壊滅させたコトで背中に背負うべき荷物が少なくなつて、今まで犯した罪と同じだけの重さになるように、荷物を増やすために起こった出来事だったのかもしれない。

死して逃れるコトは許されないから、こうして助けられた。今まで

だつてそうだった。

「アメリカか。久しぶりね・・・」

志保は低くつぶやいた。なぜかふりだしに戻っていくような感覚にとらわれて、頭を大きく振った。なにもかも上手くいかない、そう思ったらふいにくつくつと笑いが込み上げてきた。さっきまで泣きたいくらいだったのに。

「データの処理だけは、間違いなくお願いね」

これから自分に同行するジョディ先生に一つだけお願いした。

「心配しないで。大丈夫です」

「ありがとう」

こうして、数週間に及ぶ島の幽閉生活は終わりを告げたけれど、やっぱりこころの中の穴は大きく開いたままで、とりとめのない考えにふけて島をあとにした。

9、安堵

9、安堵

季節はめぐり、冷たい北風がびゅうと吹きつけることは日に日に少なくなつて、

陽射しがあたたかいとを感じるような季節にいつの間になつていた。道端に生える草木の芽がそおと顔をだして、春の訪れを告げるころ。

風は暖房がいらなくなつた家のなかにおだやかに陽気をはこんでくる。

春はとても気まぐれで。その日も陽が隠れる間近になつて、突然、冷たい雨をもたらしした。

その冷たい雨のなかに、家に走り急ぐ男が一人いた。

彼はいつものように、馴染みの警部に呼びだされて、事件の解決とともに帰宅途中、この雨に降られてしまったのだ。

一人で住むにはかなり大きなその家に、彼がたどりつくころには、頭の前から足の先までがずぶ濡れになつていた。

途中、彼の住む隣家から懐かしい子どもたちの笑い声が響いてきた。自分と、かつてその家にいた緋色の彼女がもとの姿に戻つてからというものの、

小学生だつた時分に仲がよかった彼らとは、随分疎遠になつていた。

春休みになつて、久しぶりに遊びに来たのだろうか。

あの子どもたちも博士を心配しているのかもしれない。

彼女がこの家から姿をみせなくなつてからだ。以来、博士がことなく元気がなくなつた。

彼女を、実の娘のようにかわいがっていたのだから、あたり前だ。その博士が、最近えらく上機嫌でいたことを思いだして、このことだったのかもしれない、そうひとり合点して走りすぎた。

誰もいない真っ暗な家にはいり、ずぶ濡れになった服を脱ぎすてて肢体をあらわにした。

寒気がする。雨にあたったくらいで。

そう思いながら、なんとか着がえたものの、もうろうとしたままベツトに倒れこんで意識が薄れていった。

次に目を覚ましたのは、夜も更けたころだった。熱っぽい身体には温かい布団がきちんとかけられて、頭には氷枕があった。

自分の置かれた状況を理解できないまま、ぼんやりしていると、階下からわずかに話し声が聞こえた。

「ごめんね。帰った早々、こんなお願いしちゃって」

「いいえ。気にしないで。それより驚いたわ。工藤くんが熱だして倒れてるなんて聞いて」

「本当ね。新ちゃんったら、なにしてたのかしらね。志保ちゃんありがとうね」

「どういたしまして。どうせ時差ボケで、今、頭のなかは午前中で眠れないし。それに、たいしたことじゃないわ」

熱がある。だからあまり頭がはつきりしない。

けれど、ここにいるはずのない母さんがいて、その上、姿を消したと思っていた宮野までいる。

頭が痛くなるような状況だ。ぼんやりしているどころではない。

新一は天井をにらんで、熱でまわらない頭でそれなりに考えた。

そうしていると、ゆつくりと部屋に足音が近づいてきた。

トビラの隙間から廊下の明かりがすうつとのびて、うす暗い部屋にその影を落とした。

そして頭上から聞こえてきたのは、久しく耳にできなかった彼女の懐かしい声だった。

「またムリしてたんでしょ。バカね……」

変わらない。だからこそ、少しむっとして新一は答えた。

「……久しぶりに会って、第一声がそれかよ？」

彼が寝ているだろう、志保はそう思って言ったのだ。

それなのに、案外しつかりとした返事があったことに、志保は驚いて小さく笑った。

「思ったより元気ね。念のため楽になれるように点滴しておいてあげるわ。ポカリみたいなもんだけど」

あなた熱が高いのよ。志保はそう言って、溶液と管を用意して、新一の腕に針を注した。

「私たちの細胞はフツーの人より酷使されてるんだから、油断しちゃダメよ。何度も言っているけれど」

本当に変わらない。

新一は変わらないことにむしろ驚いていた。

その口調も、目も、顔も、髪も、手つきも。痩せたとかそんなこともなく。なにかもそのままで。

会っていない時間はなんだったのかと思っていたくなるくらいに。だから、素直に返事をした。つもりだった。

「……わーってるよ」

低く呟くように言ったその言葉に、志保は小さく笑ったままにも言わずにさっと用意を終えて、

「点滴終わるまで、ここにいろ。すぐ楽になるから、そのまま寝

たらいいわ」

そう言つて、ベッドの脇に椅子を持ってきて静かに座った。

外の雨はまだ降り続いている。規則正しい雨音が静かに響いて、静寂な部屋をより一層静寂にさせる。

二人はもうどのくらい会わなかったのだろうか。

四カ月前、彼は彼女を助けに行ったのに、息つく間もなく、彼女は再び姿を消した。

安全な場所にいる、そうわかつていたからか、二人は互いに連絡を取ることもなく、そのまま時が過ぎていた。

この沈黙は、その短くて長い時間に、二人が平和ですごしていたことを意味しているのだろう。

それでも、聞きたいことは山ほどあるような気がする。

今までどうしていた、ということより、今どうしてここにいるのか。あたり前の何故を聞いてみたかったけれど、いまそれを聞くのはなんとなくはばれる気がした。

しばらくして点滴が効いてきたのか、新一は体がすうっと軽くなるのを感じた。

目をゆっくり閉じて、襲ってくる眠気に身を委ねた。

そのうち、静寂の中、熱でぼんやりした意識の中にはいつてくる志保のかすかな声を新一は遠くで聞いた。

「工藤くん、……せつかく助けにきてくれたのに、ろくにお礼も言えなくて……」

言いためらっているわけではないだろう。けれど、言いよんどんでいるような感じだと思った。

「……ごめんなさい、本当に、ありがとうね」

こいつはこいつなりに考えていたのかもしれない、そう思ってたんとなく安心した。

「それと、・・・ただいま。帰ってきちゃったわ」
意外な言葉だった。

と同時に、夕方に雨の中で聞いた子どもたちのはしゃぐ声は、実は阿笠邸に帰ってきた彼女を取り囲んでいたのだと知って、博士の嬉しそうに、しかもくしゃくしゃに涙ぐんでそうな顔が目に見えんできた。

今ごろ博士は、となりに住む友人の息子が熱を出して、そのために帰ってきたばかりの愛娘を取られたと言って、少しむっとしているのかもしれない。明日は博士にもありがとう、とお礼を言わなければならない。そう考えた。

この様子は、はたからみれば新一は寝ているようにしかみえなくて、志保はいろいろなことを、知ってか知らずか遠慮なく物を言っている。頭の中で思いついたそのままを口にしてるように。

そのたびに新一は心の中で反論するはめになった。たとえば、

「寝顔はかわいいのね」

—— うっせー。

「大きくなったよね」

—— お互いさまだろ。ったく。

そう頭のなかで思って、ふと気づいた。

もとの姿にもどってからというもの、ろくに彼女と話したことがなかったことに。

小学校に行くこともなくなって、彼女とも接点はなにもなくて、あ

るとすれば博士くらいで。しかもそれは非常に稀なことだ。

自分は高校生をしていて、蘭がいて、彼女のいないあいだに大学に進学することも決まって、

事件だといわれれば向かって行つて。

でも、こいつはどう過ごしていたのだろうか。

『おめーはひとりじゃない』

小学生の時分にそう言ったことはあつたけれど、あのときは確かにひとりじゃなかったのだと思う。

元太も、光彦も、歩美も、俺も、いつもそばにいた。けれど。

あいつは宮野志保に戻つたことで、俺ら以外の知り合いがいるはずもないこの街で、

子どもたちもまわりにいなければ、誰もあいつのそばにいなかったんじゃないのだろうか。

『退屈だから』

だから、あんな訳のわからないことを言つて、ひとりぐらりとあの島へ行つてしまったのはそのせいなのかもしれない。

それに、だ。

『…ね、このまま”江戸川コナン”と”灰原哀”でいい？私はこのまま、あなたと一緒にいたいのに……』

あいつは解毒剤をくれたときに、おれにこう言つたのだ。

あいつにはこうなることがわかつていたのかもしれない。いまさらながら、と、新一は考えた。

志保はまだ一言ずつ紡ぎだすように、ゆっくりと話していた。

「かわいい手をしてたのに、…本当は、ゴツゴツでたくましい手だったのね」

ふとんから出ている新一の指先に、志保の華奢な指が触れる感触があった。

「もう昔みたいに、手をつないでくれないのかしらね…」

志保の、思いもよらない言動に少し驚いた。

「この手、好きだったのよ。…あなたのまつすぐな瞳も。私は、あなたの全部が大好きだったの」

ふうと志保は小さくため息をついた。

「でも、あなたが好きなのは、幼なじみの彼女。」

その一瞬、新一の頬に志保の唇が柔らかく触れた。ほんの一瞬の出来事。

「…悔しいから。」

そう言った彼女の口調は笑っているように聞こえた。

「…私ね、まだあなたを失いたくないから、…まだ一人じゃ淋しいから、…そばにいて。…守っていて」

志保はほんの少し考えこむようにして、低く呟いた。その声はどこか淋しげで。

「…これって、やっぱりあなたに言っではいけないワガママ、よね」

そのとき彼女が考えていたことがやっとわかった。

そういうことなのだ。ワガママというのはつまり、彼女の本心なのだ。

どれくらいだったのか、志保は点滴が終わるころを見計らって、針を外し、長い管を片付けたところに、有希子がそつと部屋のトビラを開けて、母親らしい心配そうな顔を覗かせた。

「志保ちゃん、どう？」

「よく寝てるわ」

何も問題はない、そう思って志保は即答した。その返事に安心したのか、有希子は

「よかった。コーヒーいれたから、一緒に飲まない？」

そう言つて、志保を誘った。

「いい香ね。行くわ」

有希子が出ていったあと、志保は新一の頬にもう一度、触れるだけのキスをして、部屋を後にした。

「おやすみ」

そう静かに言つて。

訳がわからない。ひと言で言っ飛ばせばそれだけだけれど。でも、なぜかあいつはもうどこにも行かないような気がして、新一はこころなしか安堵して、ゆっくりと深い眠りについた。

9、安堵（後書き）

投稿が大幅に遅くなりましてごめんなさいっ。

ここまで遅くなるつもりもなかったのですが、

実はこの9話の次が気づまりで…ですね。うん。

気分転換に違うお話を書いていたり、ちくちく針を進ませていたりしていたら、こんなに遅くなってしまいました。

また次話もきちんとアップします。次は『10、理由』。

10、理由

10、理由

軽い――。

翌朝、昨日のあのだるさはなんだったのかと思うほど、自分の身体は見事に回復していた。

熱も無事さがったようだ。ピピツと終わりを告げる体温計をみて、ほっと安堵した。

新一は静かに立ちあがって、窓にぶ厚く下がるカーテンを勢いよく開けた。

体調をわずらわしてくれた、昨日の冷たい春の雨も夜が明ける前にはあがったようだ。

ふと、ゆうべの出来事を思いだす。

熱をだしてもうろうとしていた。そして、志保と、有希子の声を聞いた。

―― また無理してたんでしょ。バカね。

そう言った彼女の口ぶりが、四ヶ月前のここを去る前と、それよりもっと前の灰原とも、

ちつとも変わってないことが妙に腹ただしかった。

だから、ほとんど無口なままだった。もちろん、口を開けて喋ることさえ、だるかったことも事実ではあったが。

ともかく。

心配事がひとつ解決した今は、真っ青な空のように澄み渡りはしないけれど、なんとなく気分がいい。

いつもはひとりで住むその家に、自分以外の人間がいることはめったにない。

ダイニングで、新一はため息をついて、辟易した。

ごくあたり前のように、おはよう、とにつこりと言い、コーヒーを楽しむふたりの姿に。

「おめーなあ、人んちで、なにくつろいでんだ？」

志保は新一を上目づかいにじろりとみて、

「あなたのことが心配でとんできたのよ。少しは感謝なさい」

と冷たく、でも心配していると言った。それが志保らしいと、新一は笑った。

久しくまともな朝食をとっていなかった。それに反して、テーブルにはいろいろなものが並べられていた。

粥がはいっているらしき小さな土鍋と、卵の類と野菜と果物と、コーヒーと。

最後のそれまですべて、志保の仕業だと思った。

—— ただいま。帰ってきちゃったわ。

よそつてもらった粥を口にしながら、昨晚の志保の言葉を考える。

思いのほか、落ちついた声だった。そのことに、単純によかった、そう思った。

事実、博士などかわいそうで見えられないくらいだったんだ、そう頭から怒鳴りつけて怒ってもいいくらいだと考えている。

それに、自分も心配だった。

—— 淋しいから。

その口調に思わずときりとして、目の前に座る志保をちらりと見る。有希子とふたり、談笑している。

女というものは、と思う。結託するところも強いものかと。

だからため息がでるのだ、そう思ってたわざと大きくため息をついた。

「なあに、新ちゃん」

案の定、有希子がそのため息にからんできた。

「べつに」

とだけ言っていたずらに笑って、そういや、とふたりに訊ねた。

「だいたい、宮野と母さんがなんでそんなに仲良しなんだよ？」

ふたりは顔を見あわせて、自分を笑っているようだった。

「いまさらね。工藤くん、あなた鈍いわ」

志保の言葉に少しむっとしながら、で？とふたたび訊ねた。

「実はね、アメリカで優作さんと私と志保ちゃんと三人で暮らしていたのよ。もう三ヶ月になるかしらね。

志保ちゃんが帰るって言うから、私も一緒に来ちゃったの。

そうしたら、新ちゃんったら熱だして倒れてるじゃない。驚いちゃったわ」

有希子はそこまでひとり話して、コーヒーをひと口ぐりと飲んだ。

「ふうん」

ジヨディ先生の計らい、ってところだろう、そう新一は考えた。

志保本人が、帰る、と言ったということは、彼女にとって、いい方に好転したのだろう。

その証拠に、有希子と話す彼女の顔を見ても、安らかだと思う。やけに笑顔が多いし。やさしいし。やわらかいし。

口調に棘がなくなった訳ではない。けれど、自分が傷つくのを守るために出してきた棘とは少しちがう気がする。

志保は変わったのだと、新一は気がついた。

—— そばにいて。守っていて。

以前の彼女なら、たとえ相手に意識がなくても、その本人を目の前にして、
自分の欲しい気持ちを自ら述べることなどほとんどしなかったと思う。
それだけ、素直になれるなにかがあったということなのかもしれない。
い。

「工藤くん、熱は？もう大丈夫？」

志保の突然の呼びかけに驚いた。

「おめーこそ、いまさらだぜ？」

ダイニングへきてからどれだけだったと思ってるんだ、という言葉
は飲みこんだ。あの口調にはかなわないと思って。

「熱は下がったみたいだぜ。身体も軽いしな。サンキュ」

新一は感謝の意をこめて、志保に言った。

「どういたしまして。あとは、博士ね」

「は？博士も熱だしてるのか？」

「少々お怒りのご様子だね。帰ってきたばかりの私が、あなたのと
ころに行ってしまうから、ですって」

やきもちよ、志保はくすりと笑って言って、じゃあ帰るわ、と、と
なりに建つ阿笠邸へと戻っていった。

有希子に、志保は変わったのではないかと言ったら、

「新ちゃん、気付いてたの？さすがねっ」

その指摘に満足そうに、まさに自分が予想していたとおりに反応し
てくれたと、つい笑ってしまった。

「志保ちゃんってね、新ちゃんのこと、やっぱり好きなのよ。哀ち
やんのころから」

冒頭からそんな話かと、辟易する新一を完全に無視して、有希子は

続けて言った。

「ほら、じつと見てるのは好きだってことって教えてあげたでしょ」さらに、それに本人もそう言ったわ、とつけ加えた。

「小さいころから自由がない組織にいて、言いたいことも言えずに、したいこともできずに、

そうやってなんでも我慢するのがあたり前の生活をしていたのよね」彼女をいたわりながら、有希子は話していた。

「そうだな」

小さく返事をした新一を一瞥した。やけに真剣な表情をして。

「組織を壊滅させて、解毒剤をつくって、新ちゃんを戻して、すべきことはしたの。」

自分のしたいことはなにもかも置き去りにして、ね。

もしかすると、自分のしたいことがなにかと、欲することもできなかったのかもしれないわ。欲し方を忘れて」

有希子の言葉に、そうかもしれない、と新一は思った。

「あの島に誘拐されて、A P T X 4 8 6 9 を作れと言われて、辛かったと思うわよ。」

志保ちゃんね、本当は作らないつもりだったけれど、あなたが銃でおどされているのを見て、

その薬を最後は自分で飲んで、それで終わりにしようと思ったらしいの」

「だからと言って、あいつが」

という新一の言葉をさえぎって、有希子はうなずいて話続けた。

「そうよね。私もそう思うわ。ただね、志保ちゃんは、生きていることに申し訳ないと思っているふしがあったの」

わかるでしょ、と有希子は同意を求めた。その通りだと、新一は答えた。

「もうすべきことは果たしたんだし、ありのまま、素直にいたらいいのよって言っただけなの。」

「できるだけ一緒にいて、安心できる場所をあげて、支離滅裂なままでも些細なことでも話すようにして、」

「蜘蛛の糸をほぐしてあげたって感じがしらね」

有希子はこちらをみて微笑んで、新ちゃんがしてあげないからよ、とつけ加えた。

でも、と言っただけ、冷めきったコーヒーに手をのばして、

「新ちゃんが好きだってことも、解毒剤を飲みたくなかったことも、子どもでいたときに楽しかったことも、」

戻ったあとがひとりで淋しかったことも、新ちゃん相手なら言えなかったでしょうから、これでよかったのよね」

安堵した表情を浮かべて言った。

「新ちゃんが変わったと思ったのなら、きっと大丈夫ね」

有希子はそう結論を出したようだった。

「優作さんもそう言ったのよ」

保証つきなのだ、と言わんばかりに。

「そうだな。大丈夫だよ」

母親の安堵した表情につられるように、新一も微笑んでこたえた。

それでも。

あいつのワガママには応えてあげようと、新一は考えていた。彼女をひとりにしたことを、ここから後悔していたから。

「いいことするじゃねーか」

「さすがでしょ」

ふふん、と満足げにいう有希子に、

「ああ、亀の甲より年の功だな」

と言ったあと、しまった、と考えるだけの「間」があつて、逆鱗にふれたことを後悔した。

11、幸せ

11、幸せ

「外は気持ちいーな」

新一と志保は、川原までと言って、散歩にでた途中だった。ふたりは足をゆっくりと進めながら歩いていた。

うららかで気持ちがいい季節になったと実感できるような、春の陽気の中を。

「散歩にいこう」

新一が阿笠邸に突然やってきたかと思うと、そう言ったのだ。

あらかじめ決めて、そのためにやってきたといった感じで。

志保はその様子に唖然とした。あまりに突飛な内容に。あまりに真剣なその表情に。

と同時に、思わずぶっとふきだしそうになるのをこらえた。

どう考えても、と思う。

新一と散歩は、結びつかないと。らしくないと。証拠集めのために歩きまわるならともかく、だ。

でも、そのころづかいは嬉しかったから、「らしくない」誘いに素直にのってみた。

「珍しいじゃない」

志保は新一にそう言った。

もとの姿にもどってから、会ったことすら数少ない。今日も数日前の新一が熱を出して以来だった。

「まあな。おれも気分転換」

と、自らの珍しさを認めて、新一はこたえた。

志保はこらえきれず笑って、やっぱり変なの、そう思ったけれど、あえて言うのはやめた。

自分がここにもどってきてても、結局家にいることが多かったことを、彼なりに気づかってくれていると感じていたから。

こうやって黙って歩いていても、居心地はわるくない。むしろ、いいと感じる。

とかく無駄な隠しごとのない彼に、自然で、あたり前で、穏やかなのだ。

あの楽園の顔をした南の島から出たあとの、アメリカで、ジョディ先生は工藤夫妻を私に紹介してくれた。

あんまりにも塞ぎこむ私を気づかって、と。

無論、彼らとは初対面ではない。灰原哀であったときに何度となく会っているし、お世話にもなっていた。

彼らは私を快く受け入れてくれた。

過去のこととはいえ、自分の息子の姿を豹変させてしまった張本人だというのに。

私はその好意に甘えた。わが子のように接してくれるふたりがいるその空間は、とても魅力的に映ったから。

思ったとおり、とても居心地がよかった。

かつて、経験したことがない時間だった。

その緩やかな時間のなかで、私はふたつのことを考えた。阿笠邸に戻るには、そのふたつを解決すべきだったから。

ひとつは、平穩無事な生活を漫然とすごしていたこと。
ひとつは、見たくない、と思っていた彼と彼女のこと。

ひとつは、難しくない。実に簡単なことだった。

なにごとに注意深く生きていけばよかった。昔のように。

今回起きたできごとは、疑うことを忘れて、漫然と暮らすことは危険、そういう戒めだったのだから。

たしかに、考える、という行為だけでは、物理的にすべてが解決するわけではない。

けれど不思議なものだ、と思った。その行為によって、前を向いて歩こうと努力する源が生まれるのだから。

逃げないってこういうことかもしれない。とことん落ちこんで、そんな自分と向き合ってみること。

自分にとって都合の悪いこと、嫌なことから目を逸らしても、なにも始まらない。

—— あなたはあなたらしく、ありのまま、素直にいたらいいのよ。

有希子さんのあの言葉。

私はもっと、ありのままにいていいのかもしれない。そう思えたら不思議と楽になった。

—— 志保ちゃんも、幸せにならなきゃ。ね？

「工藤くん、幸せにしてた？」

新一は一瞬面食らった顔をした。

「まあな」

特別いいことがあるわけじゃねえけどな、と新一は少し笑って言う

た。

殺人を日常茶飯事としている探偵に、少し不適切な質問だったかもしれない。

志保はそんなことを思った。

「お前は？」

新一にそう訊ねられて、次は私が驚いた。

「まあね。あなたが幸せでよかった」

志保はそう答えた。

「なんだよそれ？」

彼は驚いていたようだった。でもそれは私の、真正直な願いだった。

「そのままよ。あなたが幸せなら、私も幸せだな、と思ってるね」

たぶん、と志保は考えた。たぶん、彼は信じていない。かつての私なら、言わなかっただろうにと。

依然として驚いたままの顔を私にみせていた。

「——らしくねーな、素直すぎだよ」

そう言つて、ふいに黙って数歩前を歩いていつてしまった。

志保はふと思い出していた。コナンのときとはちがう、新一のがつしりとした背中を見て。

彼がまだ江戸川コナンで、私が灰原哀だったころ、あの背中がかばつてくれたこともあった。

どちらかといえば、自分は独立した女だ。蘭のように背中を追いかけていくような女では決してない。

むしろ、横にならんで手を携えて共に歩んでいきたかったのだ。

彼を幸せにするために——。

「誰もが幸せになってくれたらって願ってるだけよ」

志保は言った。

そう願って、いつかは誰もが笑ってくれたらいいと。そうしたら、自分も幸せじゃないかと。

「俺も、お前には幸せになって欲しいと思ってるよ」

新一は振り向いて、志保の顔をまっすぐみて言った。

「そうなることを祈るわ」

志保は笑って言った。それこそ、彼らしいような、らしくないような発言だ、そう思って。

新一のらしくない行動に誘われるままに出かけた散歩は、思いがけず楽しいものになっていた。

ゆつくりとした歩調であるく新一と並んで、志保は彼をちらりとみて考えた。

悪びれた顔ひとつしないこの表情。こうやって蘭以外の女性と並んで歩いているというのに。

私には、彼女の哀しむ顔が脳裏に浮かんでくるようで、いたたまれなくなる。

私は、ねえ、と呼びかけて、ああ？と新一の短い返事があった。

「蘭さんはどうしてるの？」

「学校だろ？」

新一は即答して、私はそれに呆れた。

「そうじゃなくて、」

態度だけならず、返事にも悪びれた様子がない新一に、志保はため息しか出なかった。

「うまく、いつてるの？」

それにあんまり聞きたくもなかった。そう言いながら、顔をみるこ
とができずに、志保はわざと遠くを見た。

「うまくって、だから前も言っただろ？どうもしねーって。ふりだし

にもどっただけだろ、少し遠回りして」

ドラマじゃねーんだからさ、と新一は笑って言った。

志保には笑っている新一の考えていることがわからなかった。

「ようするに、とおの昔にふられたってことね。潔く認めたら？」

まるで負け犬の遠吠えじゃない、と志保は言った。

「ちがうだろ。もとに戻っただけだったっの」

もともと仲のいいおさなじみだったんだからさ、と、新一はあいかわらず、悪びれた顔をせず、むしろ晴ればれと言った。

だったら、と志保はため息まじりにつぶやいた。

「解毒剤を飲まずにいたかったわ」

つい本音がポロリと口について、あわてて口をつぐんだ。けれど、

新一は自分をまっすぐに凝視していた。

その目から逃げられなくて、志保は小さくため息をついて、

「子どものままいるのが楽しかったってこと。でももう、手遅れね」と言った。

「そうでもないんじゃないの」

新一は、志保の言葉を否定した。強くはつきりと。

「お前のわがままはおれが叶えてやる。そばにいるし、守ってやる。だったら問題ないだろ？」

そう言われても、それでも理解できなかった。ふたりの気持ちは相思相愛だったはずなのに、と。

「おいに問題ありよ」

相思相愛だと思っていたからこそ考えた。

もうひとつの解決すべきこと。見たくない、と思っていた彼と彼女の二つ。

志保は自分の感情をそのままに考えた。

私の彼への想いが通じることはない。けれど、愛しい想いは変わらない。

それは素直な気持ち。それでいいんじゃないかと。

自分が彼を好きだという事実。彼には命にかえても守りたい、大事な彼女がいる事実。

その変えられない事実を、自分の感情のまま受けとめて。

力をぬいて素直に認めることができたとき、ふっと思えた。

幸せになつて欲しい。二人の幸せな笑顔がみれば、それでいいのかもしれない。と。

心の底からそう願えたら、自分の心がやさしくて、あたたかくて、広くて、強くなれた気がして。素直に笑うことができた。

今なら逃げないで、二人を笑って送りだせる。そんな気がした。

短かったけれど、緩やかなふたりの愛情に触れたとき、私がこう結論を出した。

けれど。

そう心の中で決心して帰ってきたのに、彼の顔をみているうちに、その決心はいとも簡単に揺らいでしまった。

帰ってきたその日の夜の。つい言ってしまったワガママ。

—— 私ね、まだあなたを失いたくないから、……まだ一人じゃ淋しいから、……そばにいて。……守っていて。

あれは、言っではいけなかった。

「新ちゃん、きつと蘭ちゃんとつきあってないと思うわ」

有希子さんは、私にそう言った。

それはけっして、私の気を紛らすためだけのウソではなかったと思う。

「待ちつづけた蘭ちゃんには敬服するけど、」

気に病む志保に、有希子はやさしい顔をむけて言った。

「偶然、小さいころからとなりになただけなのよ。ほら、恋に憧れる年頃じゃない？」

と。

わからない、という私に、有希子さんは笑った。笑って、好いた好かれただけなのよ、と言った。

私はそうじゃなかった。

たしかに、そばにいて、守ってほしいと思うけれど、彼を守りたい、とも思っていた。

「あなたたち、さつさとつきあっているもんだと思ってたわ」

志保はため息まじりに言った。もとの姿にもどってから、とうに十ヶ月が過ぎようとしていた。

「つきあわなきゃいけないのか？蘭とおれは？」

新一は淀みなく言い、その言葉に私は困惑した。

「だってあなた、・・・」

—— 新ちゃん、きつと蘭ちゃんときあっていないと思うわ。

有希子の言葉が頭をよぎった。

「蘭さんのこと・・・」

そこまで言って、頭のなかとは裏腹に、志保は言葉につまった。

その昔、彼が彼女を心配していた様子がありありと浮かんできた。

本当は、好きだったでしょ、とか、幸せになつてね、とか言つべきだったのに。

新一はふうつと大きく息をはいて、志保をあらためて見た。

「好き、という明確な言葉を使った覚えはない。泣かせたくない、それは事実だけだな。」

ただ、それだけで好きとかつきあうとかにはならねーだろ。そこに理由も義務も必然もない。それだけのことだよ」

わかったような、わかりたくないような、複雑な心境だった。

志保は、そう、と小さく返事をして、

「どうでもいいけど。あなたがたふたりに興味はないわ」

新一はあきれた顔をした。ああ、いつもの顔だと。なんとなくほつとした。

科せられた役目、江戸川コナンを工藤新一に戻すこと。それを果たすだけが私の存在理由みたいなものだった。

その役目を果たしたあとは、ただ漫然とすごしていた。

志保の姿なら、行方をくらませることもできたかもしれない。それさえも億劫だった。

そのときの感情など考えたことなんてなかった。

—— あなたはあなたらしく、ありのまま、素直にいたらいいのよ。

そう言われて、初めて気がついた。私にはずっと淋しいという感情があったことを。

でも本当は、気づきなくなっただけなのかもしれない。

「だいたい、お前は思慮深いんだよ」

あきれた顔のまま、新一は言った。

「なによそれ？」

私は即答した。お世辞にも褒め言葉にも聞こえない言葉にムツとして。

「お前なあ、おれがいるのがわかってて、避けてただろ？」

もとの姿に戻ってから、ほとんど会ったことなかったもんな？と新一は言った。いつものように自信たっぷりの顔をして。

痛いところをつかれて、志保は言葉をなくした。

見たくないのはもちろん、その雰囲気を感じたくなかったのも事実だった。

——素直にいていいのよ。

「私のわがママを叶えてくれる。そう言ったわね？」

「ああ」

姿が変わったいまでもまだ、

守ってほしいと思っている。そばにいて欲しいと思っている。

手を携えて、ともに生きていくことができれば、と思っている。

「本当ね？」

「ああ」

私は本当は弱くて脆いと思うから。

あなたがそばにいて守っていてくれる限り、私はあんなつまらない招待状に惑わされることもなく、

ココロをまっすぐに保って生きていけそうだと思うから。

「姿が変わっても、守ってくれるってこと？」

「ひとりにさせない」

志保は、ふうん、とつぶやくように言って、

「じゃあ、許してあげるわ」

と、にっこりと笑顔でこたえた。その言葉は、私を幸せにした。

おいこら、日本語まちがってるぞ、というぶつぶつつぶやく声を無視して、志保は軽快に歩きだした。

どこからか聞こえてくるチャイムがお昼を告げている。

「博士にお昼ごはん、用意してあげなきゃ」

志保は思いだしたように言った。

「心配いらねーって。子供じゃねーんだから」

「そうね」

いい大人だったわね、と二人で笑った。

近くの家でもお昼ご飯を用意しているのだろうか。二人のもとにいい香りが漂ってきた。

「・・・てゆーか、俺が腹減った」

「あなたもいい大人でしょ？」

新一が言い、私は首をすくめて淡々と答えた。

「僕おなか空いたなー？」

「気色悪いからやめてくれる？」

「おなか空いたあ！」

「子どものふりは通用しないわよ」

私は慚然として言い放った。

「・・・わかった。じゃあ、腹へった。メシ作れ」

新一はそう強く言い張って、

「誰にもの言ってると思ってるの？」

と、私がまた淡々と言う。

「志保」

「・・・」

「おい」

「・・・」

「くら」

「・・・」

「返事くらいしろ」

「・・・ご飯、いらないのね？」

「いります。作ってください。お願いします」

「最初からそう言えばいいのよ」

と、志保は笑って言った。新一は横で不服そうな顔をつくっていたけれど。

私はたぶん幸せなのだろう。

彼と出会い、一緒にすごしている。こうやって歩いて、他愛無く喋って、笑っている。

家に帰ってご飯を食べて、おながが満足すれば、コーヒーが欲しいと言っのだろう。

でも。

ときどきは淋しくなつて、あなたにそばに欲しいと願って、そして、この先も私はときどきワガママを言うかもしれない。

もと来た道を引き返して、二人で肩を並べてゆっくりと阿笠邸に向かつて歩きだす。

「たまには散歩に付きあつてあげてもいいわよ」

このまま家に戻ったら不思議な時間が終わってしまう、そう思ったら口が知らずに動いていた。

「散歩に付きあつて下さい、って言うてみな？」

いたずらっぽくいう新一に、志保は言った。

「イヤよ」

まちがっても絶対に言わないセリフだとわかっているくせに。と思
いながら。

「ったく、かわいくねーな」

「予期せぬ誘いのほうが嬉しいでしょ？」

そうだな、と言って彼は笑った。

もとの姿にもどったあと、会いたいけれど、会えなかった。

顔を見たくなかっただけじゃなかった。会う理由が見つからなかつ
た。

あの招待状は、案外ラッキーだったのだ、と志保は思った。彼と私
を、少しだけでも引き寄せてくれた。

そんなふとどきなことが頭をよぎって、少し笑って。

あまりむずかしく考えないことにしよう、それでいいと軽くうなず
いて。

となりにいる随分鈍感な彼を横目でみた。

陽気な春の、昼下がりであった。

終

11、幸せ（後書き）

終わりです。

ことは、新蘭ありきのもとでならば、志保はどうするかな、から始まったのです。

でも、最後書くにあたって、志保ちゃんがひとりってのはやっぱりだ！と思ひまして。

で、結果、微妙な距離感の結末になってしまいました。
まあ、これはこれ、ということにさせていただきますいませ。

あと、最初は入院中で、携帯でちまちま書いていて、それが見苦しい文章ゆえに最後に加筆修正させていただいております。

筋書きとしては変わっていませんけれど、小説らしくなったとか・・・ああ、ごめんなさいーっ！

途中、更新が遅くなりましたが、最後まで読んでくださって、ありがとうございます。

読んでくださった方々、感想を書いていただいた方々に、ほんと感謝しております。

おかげで楽しく書かせていただきました♪

浮気しながら書いていた、次作はですね、もちろん哀ちゃんです。

恋愛です。ていうか、それしか書けない。

いま思いついたままばらばらと書いてます。また見通しがつき次第、投稿させていただこうかと思っています。

では、本当に、最後までありがとうございましたっ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9200a/>

楽園への招待状

2010年10月10日13時20分発行